

【高校部門・優秀賞】

まぶたに眠れる銀河

私立開智日本橋学園高等学校 第3学年 焼山 美羽

「信じてないね。目を閉じてもわかるのに」

一体どういうわけだろう。目が見えなくなった女の子の言葉に私の眉がピクリと動く。正直なところ、私は笑い話だと思っていたのに、お寺の一角を借りて生け花をする彼女はやけに深刻そうだった。

見えないはずの銀河が、まぶたに潜んでいるというのだ。隣で一緒に聞いていたお寺の住職は、「何か見えないものを見ようとする力を、心で働かせているということだね」と口を挟む。彼女はそれに頷いて、私に向かって話を始めた。

例えば、生けるための花材にまっすぐ手を伸ばす。その時、掴む百合やトルコキキョウは両目を瞑っていても、ぼんやりと感じ取れる。黒色の花器に注ぐ水は深い青空。実際に見えていなくても信じれば、花が淡い星となって、ありありと見えるようになるらしい。感触に注目してススキを撫でれば、流れ星のように。何千億個もの恒星の集まりである銀河やアンドロメダが剣山から溢れ、物凄い引力で引き込むと言う。まるで、自分だけの銀河を生け花で生み出している気がするのだと。

私は彼女の話聞いても、まだ訳がわからなかった。だから試しに帯を目に巻いて、彼女と同じように視界を真っ暗にした。何も見えない中で耳をすませば、いつもなら聞こえない、葉を伝う水の音が聞こえる。そうして、空間のパーツが崩れるように新しい景色が拓けてきた。まなざしを切り替えれば、星が見えてくるようだった。きっと、自分からシグナルを送るだけで、何でも見える。実際に目が見える、見えないは関係なく。暗闇が宇宙に、花が星になることもあるのだと知った。

元々、目の前に存在しているものすべてが私にとっての世界だった。しかし、本当の世界は目の前に開示されてされているものだけではない。世界は思ったよりも、ずっと広がった。そして彼女と同じように、私の閉じたまぶたにも銀河は眠っているのだった。